

「若きポーランド」の息吹 田村 和子

岩手県での田舎暮らしにピリオドを打ち、大阪府高槻市で暮らし始めて3年8カ月が過ぎました。夏の高温多湿に辟易し、住まいの周囲に緑が少ないこと、冬になっても雪が降らないことに寂しさを覚える日々ですが、もちろん良いこともあります。それは京都と大阪に近いことで、さまざまな文化に触れる機会が増えたのです。3月25日から6月29日までは京都国立近代美術館で「若きポーランド 色彩と魂の詩 1890-1918」*展が開催され、身近でポーランドを、クラクフを感じることができました。

ポーランドがロシア、オーストリア、プロイセンに分割占領されて国を失っていた時代にクラクフで生まれたのが「若きポーランド」と呼ばれる芸術運動でした。美術の分野では当時の西欧美術や日本美術の影響を受けながら、ポーランドの歴史、伝統、風景、人物をモチーフに象徴的に描かれた作品が多いのが特徴です。

マテイコ

まずはポーランドの歴史画家として有名なヤン・



マテイコの『スタンチク』が目を引きました。宮廷道化師スタンチクの苦悶の表情が見る者の胸をも苦しくさせ、何が彼をそうさせているかに思いを馳せます。

マテイコがテーマにしたのは祖国愛でした。

マルチェフスキ

マテイコの教え子の一人で、師から祖国を思う心を引き継ぎながらも若い世代の目覚めを告げたヤ



ツェク・マルチェフスキの作品からも目が離せなくなりました。代表作の『画家の靈感』にはキャンバスをはさんで額に手を当てて悩んでいる画家と美しい女性が描かれています。女性の服はぼろぼろ、藁でできた冠を頭からぶら下げ、足には枷がはめられています。その表情は厳しく、前方を見据えています。この女性は女神ポロニアで、祖国の現状を憂えています。

ボズナンスカ

当時、女性が絵を学び描くことは難しかった時代です。そんな中、数少ない女性画家として活躍したオルガ・ボズナンスカの作品にも親しみを覚えました。『菊を抱く少女』の目には



可愛いだけでは済まされない不思議な表情があります。その悲しげにも見える目は何を訴えているのでしょうか。ボズナンスカは日本美術に大きな関心を寄せ、作品に反映させた画家でもありました。

ヴィスピャンスキ

そしてマルチアーティストとして活躍したスタニスワフ・ヴィスピャンスキの『夜明けのプランティ公園』。

ヴァヴェル城を前にしたプランティ公園はわたしもクラクフ滞在中に足しげく歩いた所で、まるで故郷を目にしたか



のような懐かしさを覚えました。青色と茶色が目立つ色調が郷愁をそそります。ただ、ヴィスピャンスキのパステル画がなかったことは残念でした。輸送面に困難が伴うためだそうです。

他にも多数の画家の作品が並び、約9割が日本初公開でした。「若きポーランド」の芸術運動は農村地域に伝わる文化や伝統も大事にしました。絵画だけではなく伝統デザインを取り入れたキリム、衣服、刺繍、レース、そして椅子や棚などの木工作品も展示されていたのは嬉しいことでした。

家族とともに初めて一年間クラクフに滞在し、小学生の二人の娘が現地の小学校に通った46年前、わたしがいたく感激したことがあります。現地の学校では小遠足と称してしばしば美術館、劇場、映画館に子どもたちを連れ出し、様々な文化・芸術に触れさせていました。当時の日本の学校ではそんなイベントは少なく、子どもたちがたまたま触れる内容は決まって子ども用の音楽会であり、子ども向けの演劇であり、映画でした。それがポーランドの学校では子ども向けに限らず、本物に触れさせる姿勢が強く見られたのです。

日本では近年、ポーランド文化を紹介する機会が増えてきました。子どもたちにもそんな場を与えたいものです。

(たむら・かずこ、ポーランド児童文学翻訳者)



新刊
紹介

『若きポーランド 手がかり』

関口 時正 (著)

未知谷 2025.4

本書からは、1880～1910年代にかけて、ポーランド文化が転換期を迎え、新しい文化が芽生え、伝統文化に新たな色彩が加わり成熟を深めた、ポーランド文化の爛熟期ともいえる「若きポーランド」と呼ばれる時代における、約30年にわたるポーランド文化の豊かな熟成と膨らみを感じ取ることができる。

この本は、長年にわたりポーランド文学作品の日本への普及に力を尽くされ、その功績により数々の賞や勲章を授けられ、本年3月には文化功労章「グロリア・アルティス」金メダルを受章された関口時正氏により、詳細かつ鮮やかに描き出されている。

「若きポーランド」(Młoda Polska: ムウォダ・ポルスカ)の時代は、ポーランドの芸術家たちがそれまでの文化的伝統や束縛から解放され自由の気運の大きな高まりをみせた時期であり、広く絵画や音楽、演劇、詩作の世界において芸術家たちの自由と解放の精神の高揚する気風が各作品の作風や技法にまで色濃く反映された。ポーランドの文化・芸術に斬新かつ革新的な息吹が漲っていたこの時代には、パリやベルリンなど国外からアールヌーヴォーなど新しい芸術運動の息吹がポーランドにもたらされた。

特筆すべきは、「若きポーランド」と同時代の明治期の日本文化がヨーロッパに与えた強い影響(ジャポニズム)が「若きポーランド」の重要な担い手の一人、スタニスワフ・ヴィスピャンスキの画風にもインスピレーションを与え、1901年にはワルシャワとクラクフでヤシェンスキ蔵日本展が開催され、当時の日本文化がポーランドに新たに生まれつつあった創造活動に独特の息吹を吹き込んだという事実である。

タイトルに『若きポーランド 手がかり』とある通

り、本書には「若きポーランド」時代を紐解くための**手がかり**がいくつも散りばめられている——近現代のポーランド文化の広汎な分野の成熟と爛熟を、音楽、美術、演劇、詩作などに携わる芸術家とその人生、作風を基本軸としつつ、「若きポーランド」の時代と、この時代の形成を担った芸術家たちに影響を与え、時に彼らの心身の拠り所となったさまざまな**ポーランドの土地**(「若きポーランド」誕生の地**クラクフ**、ポーランド屈指の避暑地、保養地であり、その豊かな自然が多くの芸術家の心身の拠り所、想像と創造の源泉となったポーランド南部の山岳地帯(**タトラ山脈**、**ザコパネ**や**ポトハレ**地方)、その他「若きポーランド」時代の担い手である詩人や画家たちの作品のモチーフとなった**国外の土地**(**ウクライナ**や**シベリア**)など、である。

近現代のポーランド文化の成熟・爛熟期である「若きポーランド」を、その時代を担い形作った芸術家たちの横顔や彼らの生み出した作品の群像をタテ軸に、それと同時代のポーランド国内外における歴史的、民族的、文化的側面の描写をヨコ軸にして多面的・多角的に詳述し、このダイナミックに激動する文芸勃興とその華やかな開花を、この時代に爛熟した水彩画やパステル画のように色彩豊かに描写して強く印象に残る一冊である。

(小池敏大、会員、岐阜県高山市)



若きポーランド
手がかり

関口時正

〈新刊紹介〉

『クラクフ・ゲッターの薬局』

タデウシュ・パンキェヴィチ (著) 田村 和子 (訳)

大月書店 2024.11

クラクフの薬局は現代における美容室のような癒しの場であったのかもしれない。戦火に包まれた日常において、そこには一種の「フォーマット化された戦争の在り方」が垣間見える。政治が孕む恐怖と民族の再興——それこそがこの本が伝えようとする記録的意義なのではないかと感じた。

『クラクフの薬局』を読むにあたり、多方面からご指導をいただき、改めて映画『シンドラーのリスト』やシベリア抑留についても学んだ。どの作品にも共通しているのは、「記録することの責務」である。

この書の著者もまた、巻頭においてその動機を明確に宣言している。私たちは、忘れ去られつつある事実と向き合う努力を怠ってはならない。

ゲッター内の薬局に描かれるのは、**民族的アイ**

